The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「母の仕事」を取材して綴る教育実践の可能性
Author(s)	久木田，絹代
Citation	大阪大学教育学年報．2023，28，p．85-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90197
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜研究ノート＞

「母の仕事」を取材して綴る教育実践の可能性

久木田　絹代

要旨

本研究では中学校で行われた暮らしを綴る教育実践を取り上げ、ジェンダー平等の視点からその可能性について考える。暮らしを綴る教育実践の中で文章を綴った子どもに対して、成人後に行ったインタビュー調査をもとに、「母の仕事」を取材して綴る教育実践が持つ意味に子どもの立場からアプローチする。インタビューは、在学中に「母の仕事」を綴った子どもの中から、記述の仕方が典型的と考えられる3人に依頼した。インタビューで振り返ってもらったことをもとに、文章の特徴を概観しつつ、教育実践が持つ意味について考察した。母の労働をほとんど認識していなかった子どもは、「母の仕事」を綴ったことでアンペイドワークの存在に気づき、母がほとんどのアンペイドワークとペイドワークを担っていることに気づいていた。綴った文章を学級集団で交流することによって、子どもたちが自分のジェンダー・バイアスを問い直す契機が生まれていたことが判明した。本研究が示す結果は、暮らしを綴る教育実践、なかでも「母の仕事」をテーマにして綴りそれを学級集団で交流することが、ジェンダー平等をめざす教育実践の一つとなりうることを示唆している。

1　問題の所在

学校は、日本近代化の過程で生まれた良妻賢母思想を具体的には「男は仕事、女は家庭」という領域の分担として教え、性役割を肯定し「近代家族」概念を支えるメッセージを子どもに送り続けてきた（小山 1991、木村涼 1999 ほか）。そうした歴史を考えた場合、学校はジェンダーの視点から常に批判的に教育実践を振り返る必要がある。本研究では中学校で行われた「母の仕事」を取材して綴る教育実践を取り上げ、中学生がそれをどのように経験したのかをジェンダーの視点から批判的に振り返る。

日常にある課題を捉える試みとして、暮らしを綴る教育実践が戦前から始まっている。筆者は地方の公立中学校で国語を担当し、1988 年から 2018 年にかけて、国語の時間に暮らしを綴りそれを子ども自身が教室で発表する教育実践を行ってきた。家族から聞き取る（取材）というステップを含んでいた実践の性質上、労働を取材して綴った文章は最も多く、1、2 年生ではおよそ 7 割を占めている。

ジェンダーの視点でみたとき労働の領域には多くの問題がある。労働には賃金が支払われないアンペイドワーク（unpaid work）と支払われるペイドワーク（paid work）があるが、女性はアンペイドワークの約 8 割を担っている（『男女共同参画白書』 2021）。ペイドワークに就く女性は 71.3%（男性 84.4%、「労働力調査」2019）[(1)] である。多くの女性はアンペイドワークとペイドワークという二重の労働を担っている。アンペイドワークを担うことを理由にして女性は「二流の労働

者」として扱われ、経済的な困窮が多くの女性にもたらされている（竹中 2011、大沢 2011 ほか）。その中で学校は、性役割を肯定するメッセージを子どもたちに送り続け、性分業を基盤とした社会を支える役割を果たしてきた（木村涼 1999）。

生活綴方運動を牽引した国分は、「綴る」に場面を具体的に描写し批判的に振り返るという意味を持たせ、「書く」と区別して定義した（国分 1977）。暮らしを綴り語り合うことには、一人ひとりがたくさんの思いを抱え込んでそこにいることを知り合う意味がある（森 2000）。筆者は中学生が労働を取材して綴った 2000 年の教育実践を取り上げ、そこでは、取材の中心には全員がペイドワークを選んでおり、アンペイドワークを「仕事」と認識する子どもは 1 割に満たないことを明らかにした（久木田 2022）。7 割以上の子どもが取材対象に父を選び、母の仕事が対象となる場合は淡々と綴られる一方で、父を綴る文章には尊敬や感謝の気持ちが多く副えられていた。母がアンペイドワークを担うことを当然とみなしている表現は、男子により顕著だった。暮らしを綴る教育実践をジェンダーの視点で取り上げた研究や、その教育実践の意味を子どもの立場から明らかにした研究はまだ多くない。その中で本研究は、執筆者が、上記の研究（久木田 2022）に続いて、子どもの立場から「母の仕事」を綴る教育実践が持つ意味に迫ろうとするものである。

表−1　インタビュイー一覧

対象者	文章を綴った年・学年	調査の年月日	調査時の年齢
隆	2000 年・中学校 1 年生	2021 年 8 月 7 日	34 歳
直子	同上	2021 年 8 月 29 日	34 歳
聡	同上	2021 年 7 月 17 日	33 歳

本研究では女性の労働を綴った子どもの文章に注目する。筆者は総合的な学習の時間（以下、総合）の開始に合わせて、「仕事」を取材して国語の時間に綴り、総合の時間に発表する実践を 2000 年に初めて行った [(2)]。そこには（「父の仕事」と比べると少ないとはいえ）「母の仕事」を綴った子どもがいる。本研究ではそのとき「母の仕事」を綴った子どもの中から人数を絞ってインタビューを行い、暮らしを綴る教育実践を子どもがどのように経験したのかを明らかにする。子どもが性別役割意識を内面化していると考えられるため、性別（ただし推測）[(3)] も考慮する。子どもに分かりやすい表現では労働は「仕事」と表されるため、授業実践にかかわるところでは「仕事」という表現を用いる。

「母の仕事」を取材して綴った子どもにとって、綴ったことにはどんな意味があったのだろうか。母と父どちらの労働にもバランスよく目を向け、ジェンダー平等の視点から労働や性分業について考えることができるために、学校ではどのような教育実践が可能なのだろうか。

２　「綴る」教育実践とインタビュー調査の概要

X 中学校は工業団地と商業地域を有する農村地帯にある。筆者は 1 年生 5 クラスの中で A 組（37 人）を担任し国語は 4 クラスを受け持った。学習指導要領 [(4)] に準じつつ「一緒に暮らしている人の誰か一人に対象をしぼり、仕事と暮らしを取材して綴ろう」というテーマで文章を綴った。その後総合の時間に教室で発表し意見を交流した。子どもが取材の中心に選んだのは父 26 人、母 9 人、祖母 1 人、祖父 1 人である。文章からは子どもにとって祖母は母と、祖父は父と類似した関係にあることが読み取れた。当時の記録では専業主婦の母が 5 人いたが取材はされていない。2 人が母とのひとり親家庭だった。取材の中心には全員がペイドワークを選んでいたが、場面を一つひとつ思い浮かべながら綴るように指示されていたことから、37 人中 16 人はアンペイドワークについても記述していた。16 人の中で詳細にアンペイドワークを記述していたのは 7 人（女子 6、男子 1）である。そのうち 3 人の女子は、アンペイドワークを明確に「仕事」と認識していた。母（祖母）を綴っ

た10人の中で、アンペイドワークとペイドワークの両方を扱ったのは女子6人、男子1人である。男子3人はペイドワークだけを扱っていた。（久木田 2022を参照）。

インタビューは母（祖母）を綴った10人の中から、扱っている労働と子どもの性別という観点で見た場合、記述の仕方が典型的と考えられる3人に依頼した。アンペイドワークとペイドワークの両方を扱った中から男子では隆、女子では直子に、ペイドワークだけを扱った中からは聡（いずれも仮名、敬称略）に依頼した（アンペイドワークだけを扱った子どもはいない）。在学中に綴った文章を前もって読んでもらい、2021年8月から9月にかけて半構造化インタビュー形式で、感染症への配慮からSNSと電話で実施した[(5)]。はじめに綴った当時のことで覚えていることを自由に語ってもらい、続いて母を対象に選んだ理由、綴っているときや綴った後に考えたこと、当時家族の仕事について考えていたことなどを尋ねた。

次節ではまず、それぞれの文章の＜始め＞＜中＞＜終わり＞より一部を抜粋し、文章の特徴を概観する。続いてインタビューを基に、「母の仕事」を取材して綴ったことが子どもにとってどんな意味があったのかについて考察する。記述は隆、直子、聡の順に進め、インタビューデータはゴシック体で表す。

３　「母の仕事」を綴ることの意味　－３人の中学生の作品とインタビュー調査から

３－１　隆の場合：母は二つの労働を担っている

《 隆の作品 》

＜始め＞「お母さんの職場は、二交代なので昼に帰ってくるときは、朝5時から、昼2時に終わる。夜に帰って来るときは、昼1時から、夜10時まである。…仕事をする前に、エアシャワーをして、手を洗って仕事をする。/ 仕事の内容は、ウエーハという製品を細く切って、製品を作っている。…細く切った、アイシーチップを、パッケージにつけ、それをきんせんではいせんする。それを検査して、ふたをかぶせる。その後また、検査する」（隆,2000年作品, …は中略を / は段落の変わり目を表す, 以下同じ）

＜中＞「早番の時はお母さんがご飯を作るけど、遅番の時は、ばあちゃんが作る。/ 休みの日はだいたい、7時くらいまで寝て、それから、朝ご飯を作って、洗たく、そうじなどをしていたら、12時ぐらいになるので昼ご飯を作る。…それから洗たく物をたたんで、6時ぐらいになったら、夕ご飯を食べて、食っきを洗って、7時ぐらいになったら、風呂に入る。それから11時くらいになったら寝る」（隆,2000年作品）

＜終わり＞「仕事でくろうしていることは、お母さんは、目が悪いので細い物を作る作業が大へんだそうです。あと、家でくろうしていることは、家の仕事も、あるので大へんだそうです。仕事が終わると、手がいたくなるそうです」（隆,2000年作品）

アンペイドワークとペイドワークという二つの労働を扱ったのは、男子では隆1人である。＜始め＞はペイドワークについての記述である。先述したように、父のペイドワークを綴る場合はほとんどの子どもが父への尊敬や感謝を繰り返し意味づけて綴っていたが、隆の文章はそれとは異なり、母のペイドワークを淡々と綴っている（久木田 2022を参照）。＜中＞では、生活の場面を一つひとつたどりながら綴り、アンペイドワークはここに登場してくる。＜終わり＞には、母は「家

の仕事も、あるので大へんだ」とあり、隆は母に共感し心配しているようである。

《 隆の振り返りーインタビュー調査より 》

隆は、父は仕事で不在のことが多く、母の方が取材しやすいという理由で母を選んでいる。

隆　お母さんのほうが聞きやすいし、書こうかなっていうのはありましたね。うちのおやじ、あんまり家に帰ってこなかったんですよ、仕事で（インタビュー 2021.8.7）

隆　綴る前はなにをしてる仕事だろっていうのは全くわかんなくて（大変だとか）あんまり思ってなかったです。あたりまえ、じゃないですけど。頑張ってるなっていうのかな、仕事もして、家事もやってたんですごい大変だなっていうのはよくわかりましたね（インタビュー 2021.8.7, カッコ内の補足は筆者）

「綴る前」、隆は母の仕事について「全くわかんな」い状態だった。しかし綴ってみて、母が「仕事もして、家事もやって」いて「すごい大変だなっていうのはよくわか」ったという。

隆は「毎日家に帰ってあげたい」ので、それができる仕事を選んだそうである。なるべく「家のこと」をするようにしていると話した。

隆　自分が今働いてみて、やっぱり母の仕事は大変だったんだなっていうのはよくわかりますね、家のこともして。…おやじの仕事とかもけっこう休みがなかったんで。…やっぱり、毎日家に帰ってあげたいなっては思いますね。…ぼくも家のことやってますもん（インタビュー 2021.8.7）

綴り始めたとき、あるいは隆は母の労働を軽くみていたのかもしれない。文章は**「母から聞いたことをそっくりそのまま書いただけ」**（隆 , インタビュー 2021.8.7）だと話したことからも、それは推測できる。しかし綴り終えて、隆はアンペイドワークの存在を認識し、二つの労働を担う母の大変さに気づいた。それまで母の労働について考えたこともなかった子どもは、「母の仕事」を綴ったことで認識を変化させていた。

３－２　直子の場合：アンペイドワークの強要という「暴力」

《 直子の作品 》

＜始め＞「私のお母さんは、…朝５時に起きて、自分の弁当、お姉ちゃんの弁当、お父さんの弁当を時間までに、まにあうように作ります。 …作り終わったら休むひまなく朝ごはんを出して、夜のうちにしといた洗たく物を干します。…干し終わったらご飯をたべて少し休み、８時ちかくになってきたら仕事に行くしたくをして、犬やねこにエサをやったら仕事へ出かけていきます」（直子 ,2000 年作品）

＜中＞「まずはくいに着がえて、８時 30 分から仕事を始めます。/ …外科は内科と比べたら救急車が多くて、やっぱり中でも、事故で来る人が多いそうです。/ …一度お母さんがやきんをして、次の日の昼までして帰ってきました。そしたらお母さんは、『つかれた、昼まで仕事をしてくると』

と言っていました。/ 帰る時間になって救急車が入ってきたら、そこでだんらくがつくまで7時、7時半、8時までしなきゃいけないことになります」（直子 ,2000 年作品）

＜終わり＞「食べおえてお母さんが少し横になろうとすると、お父さんが早くした方がきつくないからすぐ、『かたずけろ』と言います。だから、つかれている日でも少し休みたくても休めません。私も手伝っていた時、おなじことを言われた…でも、本当きついです。/ お母さんは…私の（部活動の後の）むかえにもきてくれます。おそかったりした時には、お父さんにたのんだりして、時々お父さんもむかえに来てくれる時もあります」（直子 ,2000 年作品 , 傍点 , カッコ内の補足は筆者）

＜始め＞はアンペイドワークについての記述、＜中＞はペイドワークについての記述である。＜終わり＞には夕食後のようすが綴られている。母が少し休もうとすると、父が「かたずけろ」と言うので、母は「つかれている日でも少し休みたくても休め」ない。文章からは、直子が母のことを大変だと思い心配していることが伝わってくる。しかし傍点部は、母に指図する父を直子が擁護しているようにも読める。

《 直子の振り返り―インタビュー調査より 》

直子は、母を選んだのは「父よりも母を思う気持ちがあったからだ」と話した。

直子　母は夜勤のときでもご飯をつくって出かけてたんです。そんな忙しいなかでも、父が（仕事で）動けないときは、母が部活（の後）に迎えに来てくれて。だから、父よりも母を思う気持ちがあったからだと思います（インタビュー 2021.8.29, カッコ内の補足は筆者）

綴っている時は「二つの気持ちの狭間にいた」という。父が「もう少し手伝ってもいいのに」という気持ちと、「送迎をしてくれる」「父にたいしていやな表現とか書」けないという気持ちとの「狭間」である。

直子　なんで母を手伝わないんだろうとそのときも思っていたけど、部活の先生がとても厳しくて自分の意識は部活の方にいってたかもしれない。…父も部活の迎えとか、試合へ行くときとかしてくれてたから、父にたいしていやな表現とか書いてないんだと思います。送迎をしてくれる父と、でもお母さんもきついのにもう少し手伝ってもいいのになっていう二つの気持ちの狭間にいた（インタビュー 2021.8.29）

地方の郡部では、部活動を続けるには家族による車での送迎は欠かせない。母が来られない時、迎えは父に来てもらうしかない。「お母さんもきついのに」「もう少し手伝ってもいいのに」と思っていても、直子は「父にたいしていやな表現」は書けなかった。

しかし話を聞くうちに、直子が父に気を遣ったのには別の理由もあることが分かってきた。

直子　父はときどき母に手を出したりしてました。モノを投げたり、箱を投げる、モノを

もって打ちにいくとかしてました。小さいときにそれを見てて、その光景を忘れられないですね（インタビュー 2021.8.29）

直子　飼っていた犬が父のせいで排泄とか介護が必要になったのに、介護していたのは母。父のせいで犬の介護までしなくてはいけないことになって、母は泣きながらしてた（インタビュー 2021.8.29）

直子　父のこととか書いていいのかなというニュアンスもあって。勝手に人前で言ってはいけないのかなとか考える習慣が身についてて。中学生までは父を怒らせたらいかんと思ってた（インタビュー 2021.8.29）

父は身体的暴力も精神的暴力も、アンペイドワークを母一人に強要するという形での「暴力」もふるっていた。直子は「（父のことを）勝手に人前で言ってはいけない」と「考える習慣が身について」いたと当時を振り返り、傍点部は「**教室でそのまま発表したら、父が悪く思われるかもしれないと思って**」（直子 , インタビュー 2021.8.29）付け加えたと話した。父についての話は続く。中学校を卒業し部活動がなくなってからの話である。

直子　母の負担があからさまに見えるようになって。…今までは（送迎を）してくれてたから許せている部分があったけど、父にたいして、どうしてしないのと思って、気持ちがさめていってる。見えていなかった部分が見えてきて、ひどいなと思った（インタビュー 2021.8.29, カッコ内の補足は筆者）

部活動がなくなると、直子は父に「**もっと（母を）手伝うように言い始めた**」（直子 , インタビュー 2021.8.29）。そのため父と「**ケンカになって、モノが飛んでくるとかあって**」（直子 , インタビュー 2021.8.29）高校生の時に家を出たという。直子は自分のパートナーに「**私は平等がいい**」（直子 , インタビュー 2021.8.29）と気持ちを伝えたそうである。

直子は面前 DV [(6)] を経験しており、父のことや、父が悪く思われるかもしれないことを綴るわけにはいかなかった。その「制約」がある中で、直子は「母の仕事」を細かく綴った。綴ったことは、あるいは母と父の間の不平等な関係を再認識することにつながったかもしれない。しかしその点についてはインタビューでは明らかにできなかった。インタビューで明らかになったのは、その後、直子が父に対して自分の考えを主張するようになったことである。そして、アンペイドワークを女性に強要する「暴力」の存在である。

３－３　聡の場合：「近代家族」幻想を問い直す

《 聡の作品 》

＜始め＞「僕の母は、31 歳で身長 150 センチで体重 43 kgぐらいです。けっこう小さいと思います。/ 父のことは、あまり知りません。僕が小さい頃ころ離婚したからです。でも別に悲しくありません。家には、祖父と祖母がいるからです」（聡 ,2000 年作品）

＜中＞「お母さんの仕事は○（スーパー）に行って△（レストラン）に行きます。たいへんそうだなーと思います。/ ○の仕事は主にレジをします。レジはなれるとかん単だけどなれるまでがかな

りの努力が必要だそうです。/ お母さんはよく仕事であった話をしてくれます。『今日、あの人のお母さんとあってこんなことがあったよ。』というような話を聞いていると、とても楽しいです。/ あと、お母さんは〇でとく別な仕事をまかせられています。このまえその仕事を見たら、あの人は何時から何時まで働くというのを何十枚も書いていました。とてもきつそうでした。/ 夜は△で料理を作っています。/ 料理を作るのに最初のほうは、ほうちょうとかで手を切ったりして家に帰ってきたときはびっくりしました」（聡 ,2000 年作品）

＜終わり＞「〇と△の働く時間を合わせると 16 時間です。/ なんでお母さんがこんなに働いているかというと僕を育てるためです。/ きゅうしょくひとか僕が習っている物とかでどんどんお金がへっていくから、お母さんは二つの仕事をかけもちして生活を安ていさせているわけです。/ とにかくお母さんにはがんばってほしいです。でもそれでたおれたりしたらもっと大変なので体にも気を使ってほしいです」（聡 ,2000 年作品）

＜始め＞は母の紹介と家族についての記述である。＜中＞では母が昼間はスーパー、夕方からはレストランで働くことが綴られる。仕事先での話を聞くのは「とても楽しい」が仕事の大変さにも気づいている。＜終わり＞ではなぜ母が「こんなに働いているか」を綴り、「体にも気を使ってほしい」と心配している。

《 聡の振り返り―インタビュー調査より 》

聡は、母を選んだのは「お母さん（が）好き」で「一番身近だった」からだと話した。

聡　やっぱ、お母さん好きだったんで。家族全員好きでしたけど、お母さんが一番身近だったので。話があいますし、よく話してましたね（インタビュー 2021.7.17）

綴ってみて思ったのは「お母さんすごいなあ」ということである。「ほんとに帰りも遅かったので」改めて本人への取材はせず「完全に、生活から」「全部書き上げ」たそうである。今読み返しても「いいなって思」う、アンペイドワークをあまり母がしない（できない）ことにたいしては「うちはうち」と思っていた、「必死で」綴り、終わったときは「達成感」があった、当時のことは今も「覚えて」いると話した。

聡　仕事のこととかよく聞かせてくれてましたし、ほんとに帰りも遅かったので。…やっぱり、文章にしてみて、お母さんすごいなあと思いました。大変ですからね、朝から働いて夜までっていうのは（インタビュー 2021.7.17）

聡　完全に、生活から、もう全部書き上げてるなっていう。当時、中学生の自分はこういう目でお母さんみてたんだなって。なんかまあ、いいなって思いました、これ読み返して。すごい素直な、こういう目でお母さん見てたんだなって思いました（インタビュー 2021.7.17）

聡　あんまりお母さんのごはんとかたべたことなかったですね。うちはうちだったので。全然（不満に）思ったことはないです（インタビュー 2021.7.17, カッコ内の補足は筆者）

聡　もう苦手だったので、もう必死で書いたと思います。終わって達成感はありましたね、覚えてます（インタビュー 2021.7.17）

クラスで発表することは最初の学年集会で伝えていた（久木田 2022 を参照）。聡は取りかかった当初から「すごい悩みながら書いて」「みんなの前で読み上げるっていうので、すごい緊張してた」（聡 , インタビュー 2021.7.17）が、それは「周りはだいたいご両親いた」からだろうと振り返った。

聡　周りにくらべて自分がどう思われるかっていう緊張があったんですかね。…うちはもう父親がいなかったので、周りはだいたいご両親いたと思うんで。それが一番大きかったかもしんないです。その、なんとも思ってなかったですけど（インタビュー 2021.7.17）

自分の暮らしを特別なものとも「なんとも思ってな」いにもかかわらず、聡に緊張を強いたのは「周り」にある「近代家族」幻想である。発表を聴いた子どもは、聡が綴った楽しそうな（しかし経済的には厳しい）暮らしぶりや、目の前にいるクラスメイトに改めて向き合うことで、それまで当たり前と思っていた自分のジェンダー・バイアスについて問い直さざるを得なくなる。授業ではそれぞれがその場で意見を言ったり、小さな紙に書いて最後に渡したりした。聡は「周り」が「応援してくれてる」ように感じたという。

聡　その紙もらったの覚えてて、お母さん頑張ってますねみたいなことが書いてあって、うれしかったなあっていうのがありますね。やってよかったなって。自分が書いた作文で、誰かがそういう、思ってくれるっていうのを初めて知ったかもしんないです。応援してくれる感じです、共感っていうより（インタビュー 2021.7.17）

離婚のいきさつについては次のように話した。

聡　暴力があったからだと思います。…確かゼロ歳か、自分が生まれたばっかりのときに離婚しているので。…小さすぎたので全然記憶がないですね（インタビュー 2021.7.17）

聡の推測ではあるが、DV（ドメスティック・バイオレンス）があったことはほぼ間違いないと考えられる[(7)]。母は家を出ることを早くに決断し、その後ダブルワークを続けて生活を支えている。

聡は父がいないことをどう思われるか心配し、悩み、必死で綴った。綴ってみて聡はダブルワークで働く母の大変さと、母がそれほどまでに働かなくてはならない理由をより明確に認識した。経済的には厳しく母の身体への負担は大きい。それも含めてしかし、聡が綴ったのは素直な目で母を見ている、読んでいて楽しくなるような、DV から逃れた後の母と子の暮らしである。暮らしを綴り発表する実践は、発表する子どもに強い緊張をしいることがある。発表には共感を得るだけでなく、周囲が当たり前と思っている意識に一石を投じる意味がある。子どもに緊張をしいてでも発表することにはどんな意味があるのか、教員は常に、その意味を自分に問いながら実践を行う必要が

ある。

4　考察

本研究では2000年に行った教育実践を基にしながら、「母の仕事」を取材して綴る教育実践が持つ意味を、成人後に行ったインタビューにより読み解いてきた。ここで明らかになったのは次の3点である。第一に、母の労働についてほとんど知らなかった子どもは、「母の仕事」を綴ったことで、アンペイドワークの存在に気づき、母が二つの労働を担う大変さに気づいていた。第二に、母が一人でアンペイドワークのほとんどを担う背景として、恒常的な父の不在と暴力を伴うアンペイドワークの強要（DV）という構造的な問題が浮かび上がってきた。第三に、子どもは「母の仕事」を綴ったことで、ペイドワークで母が直面している困難をより明確に認識した。綴った文章を学級集団で交流することは、発表した子どもを力づけると同時に、周囲の子どもが自分のジェンダー・バイアスを問い直すきっかけになっていた。

以上の結果から、「母の仕事」を取材して綴る教育実践には次のような効果があると考えられる。一つは、アンペイドワークの存在が暮らしの中から浮かび上がり、子どもがそれを認識できるようになることである。二つには、構造的な性差別の問題に子どもが気づく可能性があることである。なぜアンペイドワークを母が一人で担わなければならないのか、母一人のペイドワークでは経済的に厳しいのはなぜか等々、子どもは自分の暮らしと重ねつつ、性差別について考えることができるだろう。三つには、綴った文章を学級集団で交流することは、子ども同士の理解を深めるだけでなく、それぞれが自分のジェンダー・バイアスを問い直し、ジェンダー平等について考える入り口になると考えられる。

続いて、ジェンダー平等の視点からどのような教育実践が可能なのかを考察する。第一に、アンペイドワークは労働だと学ぶ教育実践が必要である。アンペイドワークが労働だと分かった時、子どもはその多くを担う母の労働にも目を向けることができるだろう[(8)]。ペイドワークだけを労働と認識している見方をそのままにして労働を学ぶことは、母の労働を軽んじる見方を温存し、再生産し、強化することにつながる。第二に、暮らしを綴って交流する教育実践は、子どもが自分の暮らしをジェンダーの課題とつないで考えるうえで有効だと考えられる。子どもは暮らしを取材して綴ることで、暮らしの中にある矛盾に気づくことがある。特に母を対象にした場合、労働とジェンダーにかかわる多くの課題がそこには見えてくる。

以上のように、「母の仕事」を取材して綴る教育実践はジェンダー平等をめざすうえで有効だと考えられる。しかし、なぜそのような状況なのかを考えるための手立てはそれだけでは不足しているといえよう。さらに望まれるのは、適切な資料を補いながら、社会の構造に視野を広げ、母が置かれている状況を対象化し、労働とジェンダーについて子どもが考えることができるような教育実践である[(9)]。

本研究は2000年に行われた教育実践を基にしており、分析対象が限られている上、現在では時間も経過した。筆者が実践の当事者であることからバイアスが生じていることも考えられる。このように多くの制限があるため、ここで明らかになったことや考察は、示唆や試論的なものにとどまる。しかしながら、教育実践を批判的に検討する上で、子どもの立場からそれを振り返ったことには意味があると考えられる。本研究が示す結果は、暮らしを綴る教育実践、なかでも「母の仕事」をテーマにして綴りそれを学級集団で交流することが、ジェンダー平等をめざす教育実践の一つになる可能性を示唆している。

注

⑴ 2020年4月7日の緊急事態宣言の後、女性の就業者数は前月と比べて70万人（男性は39万人）減少した（『男女共同参画白書』2021）。ここではそのような急激な変化が起こる前のデータを用いる。

⑵ 総合では学習テーマや内容、方法は各学校の創意工夫に委ねられた。2000年の実践は教職員が早くから話し合いを始め、労働というテーマに本格的に向き合い、学年で協力して行ったものである。

⑶ それぞれの性自認は不明である。そのためここでは当時使用していた男女別男子優先名簿に従った。

⑷ 1947年の学習指導要領（試案）では、文章をつくることの学習は「つづること（作文）」である。その後名称は「作文」、「綴方（つづりかた）」、「書くこと」へと変化した。

⑸ 本調査は大阪大学人間科学研究科の研究倫理審査を受けて実施した。本人より引用の承諾も得た。

⑹ DVを目撃することで子どもは心身に影響を受ける。2005年の児童虐待防止法の改正で「面前DV」は心理的虐待の一つに位置づけられた。

⑺ 聡の卒業後、筆者は母が働くレストランで聡の母と話をしたことがある。そのときの話のようすと聡の推測とは一致すると考えられる。

⑻ 2000年に行った教育実践への反省から、筆者は以後の実践ではアンペイドワークが労働だと学ぶ過程を取り入れた。2003年にX町Z中学校で行った同様の実践では、取材対象は母（祖母）52.5%、父（祖父）46.6%、それ以外（おば）0.8%。2018年までに実践した3つの学校で割合はほぼ同じだった。

⑼ 生涯賃金、賃金指数、労働基準法、海外の状況等、文章の内容に合わせて適切な資料を補い、意見を交流する実践など。

引用文献一覧

木村涼子 1999『学校文化とジェンダー』勁草書房 .

国分一太郎 1977「生活綴方と集団主義」鈴木祥蔵 / 横田三郎編『部落解放をめざす集団主義教育』明治図書 .

小山静子 1991『良妻賢母という規範』勁草書房 .

久木田絹代　2022「アンペイドワークとペイドワークについての子どもの認識」『大阪大学教育学年報』第27号 pp.27-39.

森実 2000「人間関係づくりの理論と実践」中野睦夫 / 池田寛 / 中尾健次 / 森実共著『同和教育への招待』解放出版社 pp.83-118.

内閣府男女共同参画局　2021『男女共同参画白書』.

大沢真理 2011「経験知からの学の射程の広がり」大沢真理編『承認と包摂へ―労働と生活の保障』岩波書店 pp.1-18.

総務省統計局 2019『労働力調査』.

竹中恵美子 2011『竹中恵美子著作集第Ⅳ巻 家事労働（アンペイドワーク）論』明石書店 .

Possibility of Educational Practice of Writing about “Mother’s Work”

KUKITA Kinuyo

This study focuses on the educational practice of writing about daily life in junior high school and considers its potential from the perspective of gender equality. Based on interviews with children who wrote about their daily lives after they reached adulthood, we clarify the meaning of the educational practice of writing about “mother’s work” from the children’s perspective. Interviews were conducted with three children who had written about “mother’s work” while still in school, whose descriptions were considered typical. Based on what they reflected in the interviews, we reviewed the characteristics of their writing and discussed the implications of their educational practices. The children, who had little awareness of their mother’s work, became aware of the existence of unpaid work and realized that their mother was responsible for most of the unpaid and paid work. It was found that the children had the opportunity to question their gender bias by exchanging their writing with the class group. The results suggest that the educational practice of writing about daily life, especially on the theme of “mother’s work” and exchanging them with the class group, may be one of the educational practices of writing about daily life that aims for gender equality.